

開催地名	神奈川県小田原市
開催日時	令和5年7月22日（土） 14:00 ～ 16:00
開催場所	おだわら市民交流センター「UMECO」
語り部	田村 孝行 （宮城県大崎市）
参加者	市民 34 名
開催経緯	実災害を経験された方が、住民・職員ともに少なく、語り部の方のお話を伺いたいと考えたため。
内容	（１）はじめに 会社組織で命を失う事を考えたことはあるか？40年電気メーカーに勤務していたが、考えたことはなかった。2011年3月11日東日本大地震で息子を亡くし、企業防災・組織防災の課題があぶりだされた。 （２）企業防災・組織防災 息子が勤務していたのは七十七銀行女川支店。女川は津波常襲地帯で三陸海岸でも一番狭い代表的なV字型湾、そして山に囲まれた女川では、地震＝津波であり、津波避難は高台が鉄則となっていた。それなのになぜ高台に逃げなかったのか。支店長の指示・判断によって2階建高さ10m屋上に留まった。その結果、一人は奇跡的に生還したが、12人が犠牲となり、今も8人が行方不明のままである。現在でもダイバーの資格をとって、手掛かりを探している家族もいる。信頼する会社、支店長の指示に従うしかなかった。尚、女川の他金融機関含め、高台(堀切山)に避難した人は殆ど生命を守り抜くことが出来ている。その後、銀行側の不誠実な事後対応が続き、未曾有の大震災でやむを得なかったと2012年03月31日にて行員は死亡退職と通達があった。銀行との話合いで真実を知りたかったが一方的に話合いが断ち切りとなり、真相の究明が出来なかった。裁判をする気もなかったが、真実を知るには裁判という手段しかなかった。出来ることは全てやり尽くしたが、最高裁判所は上告棄却という対応で終わった。企業・組織には、有事の際の事前の備えと訓練、寄り添いの姿勢、献身的な体制、そして人を思いやる良心の必要性を大きく感じた。また企業風土も大切で、普段の関係性が良ければ、その判断が間違っていない、より良い意見・判断が主流になっていくはずである。 （３）つながり 震災前、ニュージーランドで地震があり、その数週間後に当事者となった。阪神淡路大震災の際も他人事で済ませていた。当事者となり、この教訓を活かす為にも、社会へ

の発信の重要性を感じている。そして他の企業(組織)防災被害者の方とも交流を持ち、特に御巢鷹山の遺族の方からは企業・組織とは敵対するのではなく、歩み寄っていく大切さを教えていただいた。まだまだ実現は出来ていないが、銀行へはこちらから歩み寄っている。

(4) 過去の被災体験を通して

宮城県は地震が多く、「地震になると雉がなく」などの言い伝えもある。この年でも覚えており、その様な伝承も必要である。

そして、避難場所・ルートを話し合い、色々な準備しておくことが必要である。

尚、下記の様な準備・工夫も行っている。

- ・内水氾濫→外構の備え、土嚢の準備をする。
- ・転倒、飛び出し防止→突っ張り棒や、食器は下の方に収納するなどの工夫をする。
- ・ガソリンは半分になったら満タンにしている。

(5) おわりに

自分の命は自分で守るという意識を持ち、今後いかなる災害が起きても、「いのちが一番」、命だけは失ってはいけない。またこの教訓を自分事に置き換え、明日は我が身として防災行動を行って欲しい。



開催地より

参加者からは、「組織・企業防災の大切さが良く分かった」「家族のことを思う田村様の講演を聞くことができて良かった。帰ったら家族と写真を撮ろうと思う。」などの意見があり、とても好評だった。実災害を経験された方のお話を聞く機会が少ないため、今後も機会を活かし、より多くの市民が自分事として考え、自らの命を自らで守る意識の醸成を図ってまいりたい。